



△記念式典での案内板除幕式の模様

への植林帯造成を提唱したのが本多静六博士である。博士は、渋沢氏から正式に防雪林造成の委嘱を受けると、早速現地を調査し造林計画を立てると共に作業

本多博士と鉄道防雪林

〔青森県野辺地防雪林百周年を記念して〕

鉄道防雪林の創設者、本多静六博士

一八九一年(明治24)東京と青森を結ぶ東北本線が全線開通した。しかし、東北北部で頻発する地吹雪は、冬の輸送を極めて不安定なものとなし、往々にして汽車を立往生させた。

当時、この鉄道路線を経営していたのは日本鉄道株式会社の社長、実業家渋沢栄一氏である。そして、この渋沢氏に地吹雪防止の決定的対策

本多静六通信

第3号

発行
本多静六博士
を記念する会

の責任者を引き受け、一八九三年(明治26)にわが国最初の防雪林を実現させた。

時に本多静六二十六歳、ドイツへの留学を終えて帰国した翌年のことである。

鉄道防雪林百周年記念式典―野辺地町―

博士によって日本に初めて鉄道防雪林が造られて、今年で満百年を迎えた。その防雪林のメッカともいえる青森県野辺地町において去る十月十三日、「鉄道林百周年記念式典」が挙行された。

式典には、博士のご嫡孫本多健一氏、博士生誕地の遠藤淳二菖蒲町長をはじめ、地元野辺地町の小坂郁夫町長、JR東日本の中村孝也盛岡支社長など総勢六十名程が参列した。式では主催者あいさつ、来賓祝辞に続き、「防雪原林案内板の除幕」「遊歩道テープカット」「記念植樹」などが和やかな雰囲気の中執り行なわれた。

野辺地防雪林には、新植時一・七ヘクタールの面積に、スギ二一、一九〇本、カラマツ一、〇〇〇本が植栽されたといわれており、現在で

も雄大なスケールのもと、百年の歴史を物語ってくれる。この防雪林には、博士の揮毫になる『防雪原林』の記念碑(一九四〇年)が建てられており、林地全体が、鉄道記念物にも指定(一九六〇年)されている。

鉄道防雪林計画に生きる「本多イズム」

防雪林の創設は、博士にとって実業分野で手掛けた最初の仕事であった。その後、博士は、一九〇八年(明治41)正式に帝国鉄道庁の嘱託となり、「鉄道防雪林計画」の策定に取り組みことになる。策定にあたって博士は、東北及び北海道地方を丹念に踏査し、かつてミュンヘン大学で学んだドイツ林学の学理を応用した。

この計画案は、一九〇九年(明治42)鉄道院で採択され、長い間にわたって鉄道防雪林造成の基本テキストとして役割を果たし続けた。

もともと防雪林は、森林が存在することによる鉄道雪害の防止・軽減というものを目的としているが、博士はこれに加え、防雪林が経済的な一事業としても成立するようにその計画をたてた。

この結果、防雪林からの発生材を売却し収入を得ることができ、以後の植栽費用等の大きな財政的支援となった。人工森林でありながら、今日まで脈々と保守進行されている野辺地防雪林を見て、ここにもまさに「本多イズム」が浸透していることを感じさせてくれる。

※参考文献「鉄道林百周年記念写真集」

東日本旅客鉄道株式会社

再び訪れたドイツ・ ターラント

葛瀬町立三箇小学校 伊藤 伸 一

博士の学んだ学校は今も健在

平成五年八月五日から一週間、単身でドイツ・ターラントを訪問しました。ご承知のとおり当地は、明治二十三年本多静六博士が留学した所であります。

私は、昨年十二月にもターラントを訪れましたが、その時期はドイツが統合して二年目であり、旧東ドイツの国情は皆目検討がつかず、折角のターラントも落ち着いて視察することができませんでした。

それにしても、その時の印象は強烈で、今でも私の脳裏に鮮明に焼き付いております。

本多博士が留学して百年たった現在、実在するはずがないと思っていた「ホルスト・アカデミー（博士が学んだ山林学校）」や「教会（会堂）」が当時のままの姿をとどめ、堂々と紺碧の空にそびえていたのです。全く信じられない夢のような景色でした。

変わり行くターラントの町並

今回の訪問で特に気が付いたことは、旧東ドイツの変貌が著しく、ターラントも例外ではありませんでした。至る所が改築ラッシュで、建物は真新しいペンキで塗り替えられていました。本多博士が時々訪れ、食事や舞踏会を楽しん

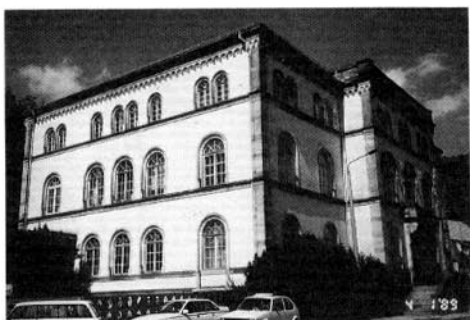
だあの「温泉屋」でさえ工事が進行中で、地面を揺する電気ドリルの音が響いております。願わくば、古き良きドイツを物語る文化遺産は、有りのままの姿で後世に伝えて欲しいと願わずにはおられませんでした。

ターラントの人々との交流

さて、今回の訪問を決意した理由は、ドレスデン工科大学総長ドクター・オット・ボスフェルド氏から、同大学主催による「ヨーロッパ林学関係大学祭」（十月）の招待状を頂いたことによりです。その際、総長さんとの話し合いの中で、次のことが確認できたことは、三箇小学校にとって大きな収穫となりました。

○ 大学祭に本多静六博士の資料コーナーを設置する。

○ 同コーナーに三箇小学校の子供達の絵画や習字、作文等の作品も展示する。



△博士が留学した当時の姿を今に残すターラント山林学校（現ドレスデン工科大学林学部）

○ 九月に開催される町の「芸術愛好会」の展示会場（ウイリアムテルの原作者、シラーの住んでいた家）に三箇小学校の子供達の作品を展示する。

○ 三箇小学校の子供達の姿に感動したドイツのジャーナリストが現在ドラマを制作中であり、来春テレビで放送される予定であること（本多博士が学んだ美しいターラントの町に憧れた三箇小学校の子供達が町の空想画を描いたことを題材としたもの）

○ ターラント小学校と積極的に作品交流を行い、国際理解教育を推進する。
人情味あふれたドイツの人々

今回の訪問では、多くのターラントの市民と接することができました。そして、ドイツの人達の人情味あふれる豊かな感性に驚かされました。特に国籍を越えて真理は真理と見極め、権威や形式にとらわれない決断力に心から敬服した次第です。

三箇小学校の子供達が国際交流にかける夢を、本当に我が子のごとくのように考え、学校だけでなく市民ぐるみでその気持ちに伝えようとする姿に接し、改めてドイツの人達の偉大さに感動してしまいました。

ムクロジの種が友好の絆を築く

私はターラントを離れるに際し、持参したムクロジの種子一箱をドレスデン工科大学総長に贈呈いたしました。（参考）ムクロジ科の落葉樹、暖地の山野に生える。果実は球形で黒い。

種子は硬く、羽根つきの球に用い、果実は石鹼の代用となる。」

そのムクロジを手のひらに乗せ、見つめていた総長さんは、「ターラントにはない種子なので、大変興味（研究の対象としたい）がある」と言われ、造林学の専門家らしい喜び様でした。そして、机の中から一枚の用紙を取り出し、次のような覚書きをくださいました。

「本日、伊藤校長先生よりムクロジの種子の入ったケースを贈呈されました。ドレスデン工科大学、ターラント林学部属するボタニックガルテン園長、シュレーダー氏が一部の種子を早速頂きました。発芽状況は、ターラント小学校の子供達が観察し、折々結果を伊藤校長先生にお知らせいたします。ドクター・オット・ボスフェルド」

私達の贈ったムクロジが凶らずも、国際交流の一翼を担うことになったこと、全く不思議です。といいますのは、この交流の仲介者は本多博士であり、その本多博士が専門とする植物を通じて交流が始まるとは、本当に不思議なことではありませんか。

三箇小学校の子供達も、ターラントから頂いたドイツ松の栽培を試み、その発育状況をターラント小学校に知らせたいと考えています。

私が予想もしていなかった沢山の成果を三箇小学校に持ち帰ることができたのは、ひとえに総長さんの特段のご配慮の賜物と子供達と共に厚くお礼申し上げます。

洋行日誌解説（後）

ターラント山林学校からミュンヘン大学へ
明治二十三年五月九日にターラント山林学校へ入学した本多博士は、同年十月七日ドイツミュンヘン大学へ転校した。山林学校にはわずか五か月間の在席であった。

ミュンヘン大学に転校した博士は、経済学を専攻し、通常四年かかるドクトルの学位を猛烈強によって、わずか二年で習得したのである。

なぜ、五か月余りで転校したのか、また経済学を専攻したのか疑問の出るところである。

このことについて、博士はその著書『体験八十五年』の中で、「いったいドイツの大学、ことに高等専門学校では、何年いても卒業証書と



△ドイツ・ターラントの街並

いうものがない。ただ何学期間何々学科を何々教授から学習した、という証明書をくれるだけである。（中略）だからターラントに何年いてもただ学期を繰り返す、就業年数が増えるだけなので、私は断然ミ

ュンヘン行きを決心したわけである」と記している。この記述によると、一旦は山林学校に入学したものの、卒業証書が貰えないと知ったので、転校したというように伺える。

はたしてそうだったのだろうか。実はその疑問を解く手掛かりが日誌の中にあつた。

明治二十三年五月九日の日誌、つまり山林学校入学初日の日誌の中に次のような一文がある。「（前略）この学校は半年か一年にて卒業のできる見込み故、それよりミュンヘン大学に入るつもりなり（後略）」。

つまり、入学当初から半年乃至は一年の在学を決めていた訳であり、それを証明するかのようになり、八月には「大修学旅行」（博士は日記の中でこう表現している）にも参加している。

また、経済学を専攻したことについては、昭和二十四年九月から連載されたサンデー毎日の「本多静六自叙小伝」の中に次のように記されている。「ターラントで一学期間勉強した後、十月ミュンヘン大学に転学した。同大学の規定では林学は国家経済学の部門に入ると、予も専門の外に経済理論を専攻することになった。」これらを含めて解釈すると、博士は初めからミュンヘン大学で林学を勉強する意思があつたことが伺える。では何故、初めからミュンヘン大学へ行かなかつたのか。なお疑問の残るところである。いずれにせよ、五か月間のターラントでの生活は、博士にとって生涯忘れられない出来事だったといえよう。

祖父の思い出

河内 幸子

大正一桁の頃、長女であった私の母は若くして植村家へ嫁ぎ、盛岡に住んでおりました。其後子供が相次いで生まれ四人になった時、寒い雪国で大変であろうと、祖父の温情から私一人は本多家へ預けられておりました。

中渋谷（桜カ丘）の家は細長く、奥深く家がございます。鉄門を入って左手に、明るい白い祖父の住む小さな家が建っております。正面奥の大きな母屋は二階建てで、其の建物の奥に祖父の住む隠居所として離れ家がございます。この建物の中は廊下等で一軒でございます。



△東京都渋谷区桜丘にある本多家

した。なかなかと日本風の広い家で、子供ながら興味深く走り廻ったものでございます。其の頃の記憶を思い出し、この年（八十三歳）になり、しみじみと祖父の面影をなつかしく書かせて頂くのは、私らしいものでございます。

祖父は茶の間に来られ、朝ご飯前に必ず「お早うございます」との御挨拶をされました。足早やに西洋館から出て来られて、母屋の廊下を通り離れに居られる養父に当たる晋おちい様へ御挨拶です。その次は渡り廊下の裏階段からお二階へ。そこには奥中で養生をしておられた、お梅おばあ様が臥床しておられました。晋おちい様のおつれ合いです。

一人娘の祖母お銚おばあ様が幸い古い時代の女医でした。看護婦を使って病氣のお世話をしておられました。記憶も薄いのでございますが、この方は間もなく亡くなれたと思っております。この病人のお見舞いをされて、表階段から初めてお茶の間に入って、祖母のお給仕で朝ご飯を召し上がり、これが毎日でございます。

子供の頃は、本多家の大勢の家族構成も全く考えも致しておらず、記憶は呑気なものでした。自分が大人になり、深く感銘を受けましたのは、終始素晴らしい活動家の祖父が朝の忙しい出勤時間前に家の中を急いで廻り、真っ先に長上に、又家族の者に礼儀正しく朝のご挨拶をされた毎日が忘れられません。

きつと河原井の折原家から受け継がれた立派

本多博士の教訓

博士が残した幾多の教訓の中で「三」にちなむ教訓を三つご紹介します。

―三度辞して従わぬは礼にあらず―

遠慮するのも二度まではよいが、三度以上にもなれば、いたずらに社交を複雑不愉快にするから、三度以上は辞退しない方がよい。

―三度いつて聴かれない時は止めよ―

自分のいうことが、いかに正しく良いことと信じていても、神ならぬ身で間違いや、思い違いがあるものであるから、その時はこれを一時中止し、さらに熟慮する。

―頼まれごととは三思熟慮のうえ返答する―

新たに重大なる用事を頼まれた場合に、軽率に引き受けたり、断つたりすると後悔することが多いから三思熟慮のうえ返答する。

なお仕付けを守って来られたに違いありません。この忙しい朝の一巡は、家の者たちもやたら朝寝坊もしておられません。短いその時間にも、庭の植木また鉢の水やり、すべて目ざとく気付かれたことでしょう。

また旅行から帰られた時、お土産を持たれ必すお離れに行かれ旅のご挨拶でした。本当に細やかに優しくお心の働く方で、外に内に時間を惜しむように即時に実行される方でした。

大正十年の年の暮、本多家にとりまして大きな不幸が重なりました。胃癌を患っておられた晋曾祖父と一人娘であった祖母がたった一日の

違いで他界致し、祖父をはじめあの時の悲しみは忘れることができない思い出になっております。それから本多家の家族情勢も変わりました、我が家に私は帰っております。父の任地が福岡の九州大学でございました。

ある日、私は東京の祖父に欲しくて欲しくてたまらなかつたピアノを手紙でお願い致しました。程なくお返事が参りました。忘れも致しません、その文に「外国では今ピアノは家庭内の必需品みたいに普及して、音楽の教育楽器になっています。欲しければ買ってあげましょう。けれども無駄はおぢいちゃん嫌いだから、ピアノを始めたら長く一生でも続くように、大切に積古であるように」とのお手紙でした。

ピアノは黒塗りのヤマハ前身の西洋ピアノと申しまして、大型の音色の美しい立派なものでした。私は嬉しくて嬉しくて、祖父に飛び付いてお礼申したい位でございました。

暫く後、年上の兄が東京の医学部へ入学致し、私も共に東京住いになり、以前曾祖父の住いであった離れ屋にお世話になりました。母屋には幼い建一君と博叔父、叔母が暮らしておりました。皆の温かいお世話で、私も青春の頃よい先生の許に好きなピアノの勉強を致しました。

生憎、私は素質が少なく下手の横好きで祖父の耳に入る練習も騒音でうるさかったに違いないと、気の毒に思っておりますが、以後祖父は次の従妹達にピアノは買って下さらなかつたと聞いております。

その後主人が八十四才の一生を送り、同じ様生涯の地鎌倉に六十年近く住み訓れ、三人の子供を育て、ささやかに暮らしてまいりました。

幸い戦火も無かつた静かな鎌倉の町も、当時ピアノも少なく、私は家の子供と一緒にその友達、お近くの方々に教える機会に恵まれ、延々とピアノを織込んで毎日を送り、只今は背中も



△博士の肖像画(本多家蔵)

曲がつて自分ではできなくなりまして、一緒に暮らす娘が音大を出ましてから、プロのピアノスト、教師を致しております、我が家は

は今もピアノの音はずっと続いております。七十年にもなるその昔、祖父が私に言われた言葉は、「ピアノは家庭用品ですから買って上げるが、無駄にならぬよう始めたら長く一生でも守り続けるように」。私は何とか不十分ながら果たした気で、このこと供養の一端にさせて頂きたいとございます。

【著者紹介】河内幸子氏は、本多静六博士の第一子長女・照子氏の長女にあたる方で、現在鎌倉市にお住まいです。また父に当たる植村恒三郎氏は本多博士の愛弟子でもあり、林学博士(元九州大学農学部学長)として活躍されました。

博士の手掛けた各地の公園(二) 埼玉県・大宮公園

埼玉県大宮公園として初の大宮公園は、太政官布達により明治十七年六月二十二日、面積七万六千七百十三坪を以て開設された。当時の概要は「老松繁茂、野趣横溢するこの区域は武蔵一の宮。大宮氷川神社の古来の由緒地であることに相違なく、神社に続く樹木や草の生い茂った森林を県令が計画し、明治十三年に切り開いて公園とした」と記されている。

明治十六年に敷設された日本鉄道高崎線には、浦和停車場と上尾停車場のみで大宮駅はなかつた。大宮の人達は駅の開設と公園の開園を願い、強力な陳情運動を行った。

明治十八年三月十六日大宮駅が開設された。これを期して同年九月、駅開設と氷川公園の開園式が行われた。当時の公園は氷川神社を含む東西南北十数町の四時佳景の地と報ぜられ、熱海と並ぶ東京の奥座敷としても囃された。明治初期から見物遊山の風潮のもと、公園の管理も幾多の変遷を経て、明治三十一年四月、埼玉県が直接の管理者となり、ここに県営公園として今日に至った。

明治四十四年以来、公園の設備拡張が行われ、更に大正初年には相当の園地拡張がなされた。

本格的拡張計画は、大正十年に本多静六博士と田村剛氏の立案による埼玉県氷川公園改良計画が作成されてからである。

その内容は、総面積十五万七千九百七十七坪、大園路、小園路、橋梁、池、運動場、境界用土壘等が計画され、樹林地面積八万五千坪以上。建築面積等規定した現在の総合公園的な位置付けがなされており、現在でも当時の施設がいくつか現存し、本多博士と大宮公園(県)は埼玉公園史にも深い関わりをもつものである。

埼玉県造園業協会 関根貞次

本多静六先生を偲ぶ(三)

島田得一

「ところで君、な、よ、華族の子弟を教育して呉れなど、親御さんから頼まれることがある。華族の子弟の容貌は共通したところがある。皆んな馬面でのっぺりしている。顎が張っていない。是は物をよく噛まないで喰う証拠だ。のっぺりして氣力がないのは働かない証明だ。何時でも何処でも好きな旨いものが喰える。着る物が着られる。自己の境遇に少しの満足感も無い。是は幸福なる生活とは云い得ない。だからこういう生活は少しもやらむ必要はない。

職業を道楽化して自己の境遇に幸福を求める。此の言葉を君へのはなむけにしよう」

是で一時間経ったかどうか、僕の六十年前の記憶をたどるのだから間違いや抜けたところがあつたかも知れない。

さて、話しの終わる頃、事務員の人かドアをあけてカケうどん三杯を届けてくれた。

「では、喰べよう」と僕は伴食の光栄に浴した。

「どうも御馳走さまでした」

「話しはわかったかネ」

「ハイ、ハイ」

「では、折原の兄にも宜しく伝えて呉れ給え」ということで僕は家路をたどった。

僕のような一介の書生の為に、当時日本の林学界の大御所が、一時間を割いて講話して呉れて、且つうどんの伴食の栄に浴したことに僕は感激した。此の訓話の通りに頑張れば偉い人になる筈であつたが、僕はこの感激をなほざりにした。

先生は境遇という字を殊更にケイグウと発音された。是は六十年たった今もはっきり覚えてゐる。

本多先生との出会いの話は以上で終わるのであるが、七十八歳まで生きると色々な事が起るものである。

昭和二十六年、僕が小林村長に当選すると、早速手掛けた仕事は野通川にかかる幸弁寺堰の問題であつた。毎年用水時期になると、北東の人達が裸になって野通川へ飛び込んで、橋脚へ錠堰を掛ける。出来上ると豆腐の真ん中へ箸で穴をあけて、醤油を注ぎ込んだサカナで焼酎を飲んだ。

ところがこの堰は上流の、特に屈巢村の人達には大いに邪魔なのだ。云ううち村長の藤村篤二という爺さんが大反対で、元荒川上流土地改良区の理事をつとめていて、真向うからこの堰問題を取り上げて撤廃を迫る。然しわが村も水利の殆んどがこの堰の成否にかかつていて死守せねばならない。

こわいもの知らずとはこの事で、僕は既成事実を口実に長谷川眞一、岸清一君等と相はかり、村費を以って妙福寺の大杉を買受けて、角おと

して堰を造り上げて上流に対抗した。用水期間中、小林側は番人を置いて堰を守る。上流側は主として屈巢の人達が当番で堰板を外しに来る。時々ぶん流されては掛けるに手を焼いた。ずつと下流まで流された堰板を拾って来て架け終るとまた焼酎である。

話が再び横道に逸れたが、此の屈巢村長藤村篤二こそ誰あろう、本多先生の所で書生を勤めた人なのだ。此の藤村さんは、砂利道歩く時には、辺の石を真ん中にめがけて蹴とばし乍ら歩くと村民にも訴え自分も実行した。本多式経済を忠実に守ったのだ。ただ、年輩になって頭がハードになったせいか、屈巢は道路舗装が他市町村に較べて遅れた。砂利道がいいと思つたのである。又諸施設も遅れた。諸種の基金を残したが、少し位の金は劇しいインフレーションの進行に追い付かなかつた。つまり旧い経済論を守って稍時代に乗りおくれたのだ。又頑固に主張を通しすぎて政治的にも稍孤立した感があつた。

お陰で小林村の土堰、角落し堰は、他の上流市町村総代の同意を得るに成功し、当時の改良区事務所山林所長等の理解も得られて、僕の菖蒲町長時代に現在の電動式堰となり、長い間続いていた抗争も終止符を打つに至つた。

本多先生の僕への講話の中に、饅頭屋の前の書生一件があるが、これこそ藤村さんであつたかと思うと今更懐かしい。

ところでも一つある。僕が満州国の営林署へ

就職した話は先に一寸触れた。

僕は昭和十四年十月末妻帯して、前任地から新しい勤務地である齊々^{ちち}ハル^{はる}営林局に赴任した。僕は齊々^{ちち}ハル^{はる}沙公園に直近の代用官舎に住んだのであったが、裏庭一つ隔てた代用官舎に入ってきたのが、杉山茂、百合子夫妻であった。御主人杉山茂さんは北海道帝大林学部卒で、齊々^{ちち}ハル^{はる}営林署業務科長であった。奥さんの百合子さんは丸山佐四郎という人の娘であった。この丸山佐四郎こそ本多先生と大変深い関係にあった。というより東京農学校、東京帝大林学部の同級生なのだ。

丸山さんの最終の職場は青森営林局長だった。片や日本林学界を背負って立つ大御所、片や田舎の営林局長、同級生にしては余りにも違うのであるが、何が原因であるか僕も定かでない。更に驚くべきことは、丸山佐四郎は首席の卒業で、明治天皇下賜^かの銀時計の受賞者なのである。丸山佐四郎さんは晩年兵庫県新宮市砂子の自宅に百合子さんの妹真理子さんの介護を受けて隠棲生活を送っていたが、まだ九年前の昭和五十八年六月^よ齢^{れい}百四歳を以って逝去された。

吾々は本多先生と云えば、正に歴史的人物のように思い勝ちだが、その同級生がつい最近まで生きていたのだから、僕自身もう歴史的年齢に達したのかと思うと感慨新なるものがある。この代用官舎の縁で、杉山夫妻と僕等とは未だに交友関係が続いている。彼は昭和二十年の終戦まで満州に頑張ったために抑留者と成り辛

酸をなめ、昭和二十六年、宮城県栗原郡金成町に帰った。当時丸山さんは東京巢鴨のトゲ抜き地蔵の近くに住んで居り、杉山さん引揚げの報を聞いて僕達は丸山さん宅を訪れ、日ならずして丸山さんと家内で引揚先を尋ねた。爾来亡くなる二、三年前迄、丸山さんと何度かお会いしている。

余分の事のみ多く肝腎の本多静六先生の記述が少なかつたが、お許しいただくと共に、人世の出合の不思議さを更めて認識する次第である。

直接体験している話は以上であるが、序乍ら一般的に本多先生に就いて承知している話もいくつかある。その一つ。

本多先生は独逸留学で学んだ経済学を、例の筆法で実践して学者としては珍しく産を為した。秩父大滝の山林二千六百ヘクタール余を所有し

たが、是はあっさり埼玉県へ寄付してしまった。その頃秩父を歩いていて、武甲山が石灰岩の無尽蔵なものと、その近くに粘土の豊富な地層のあることを発見し、現秩父セメント社長諸井さんの先々代位にアドヴァイスしてセメント会社設立を目論^めませたことは人のよく知るところである。(僕の従兄故松村文夫：秩父セメント常務：談)

さて、実は町長遠藤淳二君と去る平成四年二月十一日、県立不動岡高校同窓会の席上御一緒に、今度名誉町民として推した本多静六先生の事業に就いて、杉戸農高教諭であった小山千秋君が本多先生の研究をして居られ、顕顕碑設立に因^よんで小冊子を発行したいから貴殿が先生について何か御存知ならば書いて貰いたい、いや、その事ならば若干発表したいことがあるということとかく成った次第である。拙文多謝 (終)

秩父・大滝村に 21世紀の森(仮称)を整備



埼玉県では、平成6年春のオープンをめざして、現在、秩父郡大滝村の中津川県有林の中に「21世紀の森」を整備している。中津川県有林は、昭和5年に本多博士が秩父地域の振興と奨学金制度等の実施を希望条件として県に寄付(広さ約2,600ha)したものである。

この施設は、7つの森のゾーンと森林科学館等からなっており、炭焼きや野鳥観察、巣箱作り等が体験できるほか、ビデオを通して森林の働きを学ぶことができる設備が備わっている。

菖蒲町では、本多博士と「21世紀の森」との関係を広く内外に知ってもらうため、博士の胸像を県へ贈り、森林科学館において長く展示してもらうことになった。

博士のはなし(二)

— 生誕地での座談会から —

第二号に引き続き、昨年十二月八日に開かれた生誕地河原井での座談会において話題となった逸話をご紹介します。

○羊羹のようにピカピカした詰め襟

何時の頃かはつきり覚えていないが、博士が久喜の女学校に講演に行ったときのことだ。駅まで迎えに行ったが、一向に博士が現れないところが、いつの間にか博士は女学校に着いていたという話があった。

迎えに行った者は、博士が立派な服装をされていると思ひ込み、目の前を通り過ぎていった博士に気付かなかつたのだ。その時の博士の服装はリュックサック姿に詰め襟だった。その詰め襟も相当使い込んだもので、まるで羊羹のよ



△東京・明治神宮の鳥居の右側にある河原井から運びこまれた楠

うにピカピカしていた。久喜と同じような話はい奈町でもあったという。

○河原井に帰ったときの博士

博士は帰省するときは、いつも村境の「河原井橋」まで車で来て、そこから歩いて実家に向かった。決して車で直接実家に向かうことはなかった。偉ぶらなかつたのだと思う。

地元のみんなと家の近くを歩いた時、道端の草の名前を片っ端から全部挙げたこともあったという。このときはみんな本当にびっくりしたという。

○明治神宮の鳥居の側に立つ河原井の楠

本多博士の造った(設計した)公園としては、日比谷公園よりも、河原井では明治神宮の方に親しみを感じている。それは明治神宮の森に河原井の楠があるからだ。

大正の頃、本多博士の依頼によって、造園中の明治神宮の神苑へ河原井から楠を運ぶことになった。木は吉野輝夫さん宅のものが使われた。当時の青年団が大八車で明治神宮まで運んだ。現在河原井から運ばれた楠は、原宿駅を降りたところの大鳥居の右側にある。左側にあるのは同じころ折原家の親戚に当たる加須の多門寺の網野さん宅から運ばれものと聞いている。

○子供の頃から植物に関心があった

「博士は小さい時から、普通の子とは違っていたんだよ」という話を聞いたことがある。稲の奇形種(黄色葉の稲)を集めては別に栽培、観察していたという話を聞いたことがある。

編集後記

通信第三号の発刊に当たり、取材もいよいよ境に入りました。博士の手掛けられたJRの「鉄道林百周年記念式典」については青森県へ、また伊藤委員には、二度の訪独により、留学時代と今日のターラントの取材をしたのみならず、博士も想像しなかつたであろう、国際交流にまで発展の緒を作るに至りました。

一、二号の発刊により、各方面からの反響も現れ、既に埼玉県造園建設業界誌に、記念公園や博士の偉業が紹介されました。また日本造園修景協会から、資料収集の指導と協力もいただきました。

また、連載する「博士が手掛けた各地の公園」については、該地の公園関係者に執筆を依頼することに至りました。今回は郷土の大宮公園について、元埼玉県大宮公園事務所長の関根貞次氏から玉稿をいただき、心から感謝申し上げます。

記念する会では引き続き、博士に関する情報を収集しています。投稿も観迎しています。今後とも多くの皆様からのご厚意を宜しくお願い致します。

【編集発行】 本多静六博士を記念する会

〒346-01 埼玉県南埼玉郡菖蒲町大字新堀三十八番地 菖蒲町役場企画課内

電話 〇四八〇(八五)一一一一(代表)